

ダイコン「喜太一」を導入して 「長沼町274野菜生産組合」事例

雪印種苗(株) 北海道研究農場

安達英人

1 長沼町の農業概要

長沼町は石狩平野のほぼ中央部に位置し、札幌市から西へ約30km、車で1時間くらいの農業が中心の町です。

作付け面積では水稲が最も多く、小麦、豆類、野菜類、てんさいが続きます。

野菜の粗生産高は第2位で水稲に次ぐ品目となっています。

2 『長沼町274野菜生産組合』の概要

長沼町西部の国道274号線を南北にまたぐ地域に『長沼町274野菜生産組合』があります。

この地域は水稲、畑作と野菜との複合経営が早くから行われ、札幌近郊の野菜産地として発展してきました。従来、個選で市場へ持ち込んでいたのを、市場への高品質野菜の安定供給を目的として、出荷ブランドを『マオイ』（近くの馬追丘陵から命名）と統一し、5年前に生産組合が設立されました。

農家戸数は34戸で、代表（佐々木信雄氏）、副代表（四釜吉泰氏）の他7名の役員で運営されて

います。規約には『この会は、会員相互の研鑽と連絡協調を図り、地域の野菜の品質規格統一と生産振興を図ることを目的とする』と記されており、出荷前には選果基準の確認を行い、個人差によるばらつきがないように徹底しています。

総会では市場関係者や種苗業者を招き、野菜の消費動向や栽培技術の確認を行っています。

出荷先は札幌市中央卸売市場丸果札幌青果(株)ですが、車で1時間強と搬入時間が短いので鮮度が良く、夏秋ハクサイ、ダイコンは特に高い評価を得ています。

年間の取扱い額は1億5千万円前後となっており、主要品目のハクサイ、ダイコン、カボチャ、カンランが8割程度を占めています。

3 ダイコン『喜太一』導入の経緯

当地でのダイコン栽培は10ha前後で、露地・マ

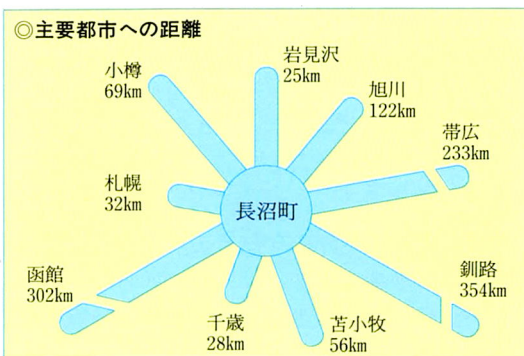


写真1 佐々木信雄代表



写真2 四釜吉泰副代表

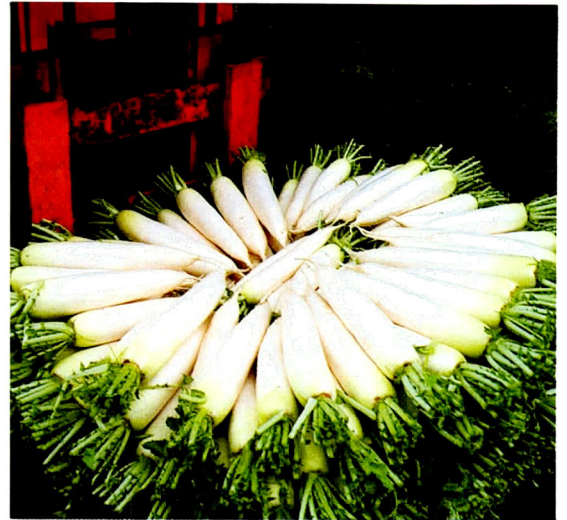


写真4 きれいに揃った「喜太一」



写真3 ダイコン洗浄風景

平成9年も同様の天候でしたが、被覆資材の効果で抽苔は減少しました。また、『喜太一』は花茎が伸びても肉質が硬くなりやすく、す入りが遅いため、抽苔品として出荷しても、内部品質が優れていることがわかりました。このため、抽苔があった圃場でも極端な減収にはならず、高値にも支えられて、平年並の売上高を維持することができました。

『喜太一』の栽培密度は株間 24 cm, 6,000~6,800 本/10 a が標準で、6,000 kg/10 a を目標収量としています。

組合代表の佐々木信雄氏は品種名が付く前から『喜太一』を栽培しており、4年目になる本年も『喜太一』を栽培し、良品多収を目指したいとの事でした。

6~7月播種では『夏元太』『RA-127』を試作中で、8月には『涼太』も栽培されています。

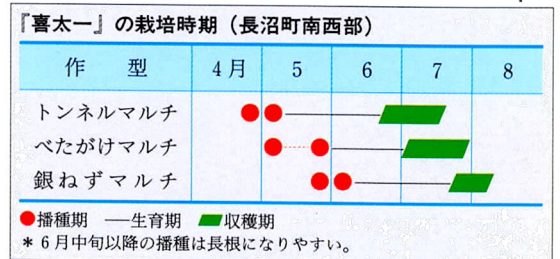
ルチ栽培が中心で、7月~11月に継続的に出荷されています。

平成7年に代表、理事の方々5名に『喜太一』（当時は試作番号S B-7015）の試作を依頼し、従来の品種よりも

- ・ひげ根が少なく、毛穴が浅く肌がきれい
- ・曲がり根が少なく、揃いが良いので多収
- ・す入りが遅く、内部品質が安定して良い

などの高い評価をいただきました。

平成8年には10戸以上で作付けされましたが、5月上旬のマルチ栽培では、異常低温のため抽苔がみられ、被覆資材の必要性が教訓となりました。



4 今後の方針

ハクサイは6月出荷のテスト栽培を実施してお



写真5 統一名「マオイ」の出荷用ダンボール

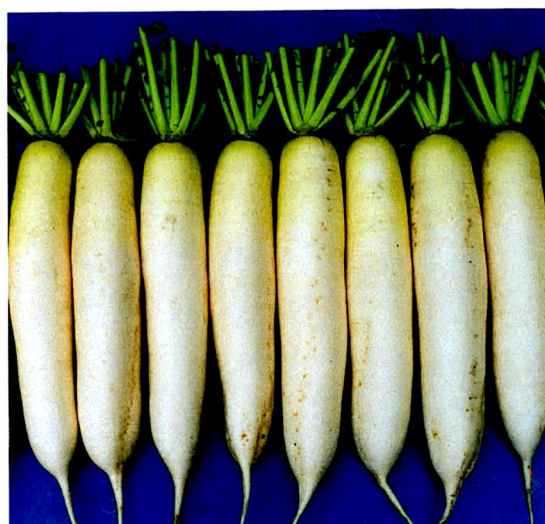


写真7 試作中の「夏元太」



写真6 収穫適期の「喜太一」



写真8 8月播き「涼太」

り、来年から早期出荷を計画しています。

ダイコンはセンチュウ害の対策として『ハイオーツ』の普及を進め、品質向上を課題としています。また、5月播種は異常気象を考慮した抽苔防止対策が重要で、被覆資材の有効利用が安定出荷

には欠かせません。

今後は、取扱い高を2億円まで伸ばすことを目標として、出荷時期の拡大、安定供給を検討していきたいという、意欲的な意見でした。

ダイコンなどの根物野菜の線虫を激減させる!!

緑肥作物 「ハイオーツ」

- ダイコン・ニンジン・ゴボウなどの大敵キタネグサレ線虫を激減させます(マリーゴールドと同様の効果)。
- ニンジン・ゴボウなどの大敵キタネコブ線虫にも減少効果があります。